



五島慶太氏伝

④

五島慶太物語

教育にかける想い



都市大等々力中高の正門内に場所を移して立つ五島慶太氏像

五島育英会の創業者『五島慶太』については、梧桐春秋やこの五島慶太物語でもすでに紹介しているが、今回はその慶太初代理事長の教育にかける想いについて少し紹介したいと思う。

明治15年4月18日、長野県ちいさがたぐん小 県郡青木村に生まれた慶太は、信州を代表する教育家であった手塚慶三郎から名前をとっていると言われる。

高校を卒業後、三重県四日市商業学校にて英語教諭として着任。東京帝国大学を卒業、農商務省、鉄道院の官僚を経て、大正9年に武蔵電気鉄道常務に就任し、以来亡くなるまで、鉄道界だけに留まらずあらゆる事業に邁進した。

慶太は57歳になった昭和12年4月19日、現在の定時制高校と社内教育を折衷したものと言われる青年学校を、当時の東京横浜電鉄内(品川区上大崎)に男子社員のための東横青年学校、女子社員のための東横家政女学校を開校する。当時、勤労青年のために青年学校を作る働きは、公立・民間企業問わず行われていた背景も重なり、この時慶太の教育にかける想いが形となった第一歩であった。

その後、昭和14年4月、東横商業女学校(後の東横学園中学校)が等々力に開校し、同居する形で東横青年学校、東横家政女学校が上大崎から等々力に移った。この東横商業女学校開校にはあるエピソードがある。

慶太は女子教育について理想を持っていたが、当時は戦時体制下にあったため、高等女学校の建物を建てることは色々と規制があった。そこで時局向きの青年学校校舎を建築するというこ
とで、建築許可を得た。ただ青年学校であればさほど費用をかける必要もないのだが、設立資金として会社からの慰労金5万円に私財12万円を加えた17万円(現在で約9,000万円)を充て、設備については贅沢に揃えた。青年学校は夜間授業のため、昼間は空いている。これでは国のためにならないと何度も役所へ陳情し、立派な校舎で東横商業女学校の開校にこぎつけたのである。

こうして女子教育という先見の目を持ち、色々な苦労を重ねながら、見事に東横商業女学校を開校した。あれから70年が経ち、商業女学校は等々力中高として共学となった。慶太は校庭から正門へ場所を変え、毎日この学校、そして都市大グループの将来を見つめている。